

相互独立的—相互協調的自己観尺度に就いて¹⁾

On the scale for measuring independent and interdependent view of self

高田 利武*

Toshitake Takata

I. 緒 言

近時、幾つか作成されている文化的自己観尺度 (Singelis, 1994; 黒川, 1994; 木内, 1995; 高田・大本・清家, 1996) は、Markus & Kitayama (1991) が提唱する相互独立的自己観 (independent construal of self) と相互協調的自己観 (interdependent construal of self) の概念に基づくものである。これは、或る文化に於いて歴史的に共有されている自己に就いての前提である文化的自己観の2つの形態であって、心理と文化の相互構成の過程での一つの中核となる、人間観或いは「自己」に就いての前提である (北山, 1998)。前者は、自己を他者から分離した独自の実体として捉えるものであり、西欧、就中、北米中産階級に典型的である。後者は、他者と互いに結びついた人間関係の一部として自己を捉える考えで、日本を含む亜細亜の文化に於いて一般的である。この2つの自己観乃至人間観の基本的相違によって、認知、感情、動機づけ等の心理過程は大きく異なるとされる。

文化的自己観は社会的表象であり、必ずしも個人的・認知的表象ではない (北山, 1998)。それ故、或る文化に属する個人、例えば日本人全員が一様な相互協調的自己観を持っている訳では勿論ない。併し、社会的表象は何等かの形で認知的表象に反映され、個人の持つ自己概念或いは自己スキーマに影響するであろう。その際、相互独立的自己観と相互協調的自己観が、人間存在の個性的側面と社会的側面に対応すると仮定すれば、如何なる個人も双方の自己観に即した自己スキーマを持ち得、その相対的な優勢度によって個人差が生じる、という視点が成立する。公刊されている諸文化的自己観尺度は、全て斯かる前提に基づいており、個人の自己スキーマに相互独立的自己観或いは相互協調的自己観が反映された程度の個人差を測定している点で共通している。

併し乍ら、これら尺度の或るものには若干の問題が存在する。例えば、Singelis (1994) の尺度には北米文化の特質に規定された項目 (相手が年上でもファーストネームで呼ぶ、等) が含まれており、黒川 (1994) の尺度は、尺度を構成する項目の加除が屢々行われその必要十分に疑念なしとしない。亦、木内 (1995) の尺度は2つの自己観の相対的優位性を一次的に

測定している点は一考を要する。確かに、一方の自己観が優勢であれば他方が微弱である傾向が一般的ではあるが、双方とも高水準或いは低水準である事例が存在すること（高田, 1992）、相互協調性の次元で現れる心理過程の変動は必ずしも相互独立性の次元での変動と並行しては行かないこと（高田, 1992；黒川, 1994）等から、相互独立性と相互協調性は夫々相対的に独立している可能性が示唆される故である。

これに対し、高田他（1996）の尺度は他尺度と同様、大学生を対象として開発されたものであるが、その後作成された短縮版尺度（高田, 1996）、児童・生徒用尺度（高田, 1999a）をも加え、日本以外の幾つかの文化、或いは日本文化に於ける各発達段階の調査対象者総計約2万5千人に対して実施され、一定の信頼性と妥当性を持つことが示されている。同時に、従来の諸研究の如き比較的少数の調査対象者ではなく大量の資料に基づいた安定した尺度値を得た上、本尺度を用いて測定された相互独立性-相互協調性²⁾に関して幾つかの興味ある知見が集積されている。本稿は、これら3つの尺度の作成過程、信頼性と妥当性、標準的尺度得点、尺度値と関連する知見等、現時点に於けるこの尺度に関する諸事項を取り纏めたものである。

II. 尺度の内容と作成過程

1. 尺度項目

青年・成人用尺度：当初作成された40項目から成る元尺度（高田, 1992；1993）の下位領域に関する再現性と安定性に疑問がある為、以下の手続きを経て20項目から成る尺度に改訂したものである。元尺度の項目は、Markus & Kitayama（1991）の記述と、日本に於ける相互協調的自己観の様態として彼らが引用する土居（1971）、浜口（1977）の記述に基づいて作成されたもので、相互独立性と相互協調性各20項目から成っている。その概要に就いては高田（1993）を参照されたい。各項目に対して「ぴったりあてはまる」から「全くあてはまらない」に亘る7段階評定を求める形式である。尚、以下の短縮版尺度、児童・生徒用尺度も含め、一般に自己評価を行う際、好ましい特性に対する否定的評価と、好ましくない特性に対する肯定的評価は必ずしも等しくないという遠藤（1992）の示唆に基づき、逆転項目を設けることは敢えてしていない。

まず、大学生4群（各群140～227名）に対して元尺度を実施した。相互独立性・相互協調性項目毎の項目分析（GP分析及び全体平均と各項目の相関分析）を各群毎に実施し、4群の何方かで有意差（1%水準）或いは有意相関（0.1%水準）が得られない10項目を除去した。次いで、残余の30項目に対して各群毎に因子分析（主成分法、バリマックス回転）を行ない、各群とも6因子解を得た（固有値1.2以上かつ累積寄与率50%以上を基準）。その結果、群により異なる因子に含まれた7項目は多義的項目として除外した。更に、残った23項目に就いて因子分析を各群毎に行ない、各群に共通して抽出された「集団依存性」因子に属する2項目は、普遍的概念である相互協調性とは稍異質な日本文化に特殊なものと考えられる為（高田・松本, 1995）、これを削除した。併せて、残余21項目中、意味内容が比較的類似した2項目のうちの

1項目を除去して若干の語句の修正を行ない、相互独立性及び相互協調性各10項目から成る最終的な改訂版尺度とした。これら手続きの詳細に就いては、高田他（1996）を参照されたい。

最終的青年・成人用尺度を付録に掲げるが、このうち奇数項目は相互独立性、偶数項目は相互協調性測定項目である。後述する如く、全ての群を統合した因子分析の結果に基づき、相互独立性は「個の認識・主張（4項目）」と「独断性（6項目）」、相互協調性は「他者への親和・順応（6項目）」と「評価懸念（4項目）」の、各2つの下位領域から構成されている。

短縮版尺度：多項目から成る社会調査の中に組み込む際、回答者の負担を軽減せしめる目的で作成された、10項目で構成される尺度である（高田，1996）。上述した4つの下位領域のうち、「他者への親和・順応」以外の3下位領域は、因子分析に於いて因子負荷量の高い各2項目ずつ計6項目を選択し、「他者への親和・順応」に関しては、元尺度（高田，1992；1993）に於ける複数の因子が包含されていることを考慮し、必ずしも因子負荷量の高さにはよらずに内容を勘案し4項目を選択して作成された。従って、短縮版尺度は相互独立性4項目と相互協調性6項目の合計10項目から構成される。付録の青年・成人用尺度のうち、*印を付したものが短縮版尺度の項目である。亦、同じく回答者の負担を減らす目的で、「あてはまる」から「あてはまらない」に亘る5段階評定とした。

児童・生徒用尺度：従来、検討されることの少なかった年少者の相互独立性・相互協調性を年長者と同一次元で連続的に比較する目的で、当初作成された児童・生徒用尺度（高田，1994）の不備を補うべく作成された尺度である。青年・成人用尺度と同じく、相互独立性・相互協調性各10項目から成る。これらは、小学校教員の意見を加味して青年・成人用尺度の各項目の記述と内容を平易に改めたものである。付録に示す尺度のうち、奇数項目は相互独立性、偶数項目は相互協調性測定項目である。これも小学校教員の示唆に基づき、「あてはまる」から「あてはまらない」に亘る5段階評定とした。

これを、小学校4～6年生957名と中学校1～3年生1,020名に実施し、後述の如く青年・成人用尺度と同じく4つの下位領域から構成されることを小学生と中学生毎に確認した後、各下位領域毎の項目分析（GP分析及び全体平均と各項目の相関分析）を実施した結果、何方の項目でも1%水準の有意差或いは有意相関が認められた為、全項目を尺度構成項目とした。但し、学年別に分析を行った場合、小学校4年生では一部項目に於いて有意な相関が得られず、この尺度の適用は不適切であると判断される。これら手続きの詳細に就いては、高田（1999a）を参照されたい。

2. 得点算出と下位領域

得点算出：青年・成人用尺度に於いては、各項目とも「ぴったりあてはまる」から「全くあてはまらない」までを7～1と数値化し、相互独立性・相互協調性、或いは下記の各下位領域毎に数値の平均を求め各々の得点とする。5段階評価を用いる短縮版尺度と児童・生徒用尺度に於いては、青年・成人用尺度との対応を図るべく、「あてはまる」を7、「ややあてはまる」を5.5、「どちらともいえない」を4、「ややあてはまらない」を2.5、「あてはまらない」を1

とする。回答選択肢のみを7段階とした尺度を実施した結果との比較を通じて、斯かる7段階変換値を用いることが妥当であることが確認されている（高田，1999a）。尚、上記の項目分析と因子分析を実施する際も、この得点算出の方法によっている。

下位領域：青年・成人用尺度、短縮版尺度、児童・生徒用尺度の何方に就いても、相互独立性は「個の認識・主張」（他者とは異なった存在としての自分を認識する傾向：項目番号1、13、17、19）と「独断性」（他者に配慮を払うことなく自分の判断に基づいて行動する傾向：項目番号3、5、7、9、11、15）の、相互協調性は「他者への親和・順応」（他者との同化を重んじる認識の傾向：項目番号10、12、14、16、18、20）と「評価懸念」（他者の眼差しや評価を気にする行動の傾向：項目番号2、4、6、8）の、各2つの下位領域から構成されることが、小学生（5年生以上）、中学生、高校生、一般成人の各対象者に於いて、確証的因子分析を通じて確認されている（高田1998a；1998b；1999a）。

本尺度は、相互独立性と相互協調性は別次元に位置すると捉えているが、相互独立性と相互協調性との間には弱い負相関（青年・成人用尺度-.28；短縮版尺度-.16；児童・生徒用尺度-.18）がある。併し、各尺度とも相互独立性項目と相互協調性項目の夫々の中では内的一貫性が示されるのに対し、全項目を一括した場合には α 係数が低下することから、双方の相対的独立性が推論される（高田他，1996；高田，1999a）。

亦、各下位領域間の関係に関しては、相互独立性に関する下位領域と相互協調性に関する下位領域との間の相関は相対的に低い一方、「独断性」と「個の認識・主張」、「評価懸念」と「他者への親和・順応」の間の相関は或る程度高いが、同一下位領域の再検査相関よりは低い。即ち、下位領域尺度内の整合性よりも下位領域尺度間の相関が低いという結果が、青年・成人用尺度と児童・生徒用尺度の双方に於いて確認されている（高田他，1996；高田，1999a）。これらの諸結果は、相互独立性と相互協調性、及び下位領域間の相対的独立性を示唆している。

更に、相互独立性と相互協調性が夫々2つの下位領域に分化する傾向は、日本文化に特有である可能性が示唆されている。即ち、短縮版尺度を用いた成人資料（高田，1998a）と、青年・成人用尺度を用いた大学生資料（高田，1999d）の双方に於いて、中国人と越南人では相互協調性は日本人と同様、「独断性」と「個の認識・主張」の2因子が見出されるが、相互独立性では下位領域への分化が認められない。亦、青年・成人用尺度による加奈陀人と豪太刺利人大学生資料では、相互独立性と相互協調性の双方とも下位領域への分化は明瞭ではない（高田，1999a）。

III. 信頼性と妥当性

1. 信頼性

青年・成人用尺度：高校生2,982名、大学生2,453名、一般成人2,788名に実施した結果に基づき、各下位領域毎のCronbachの α 係数は表1に示す如くである。高校生に於ける「個の認識・主張」、及び大学生と成人に於ける「他者への親和・順応」の下位領域に稍問題が残され

るが、概ねほぼ満足し得る内的整合性が示されている（高田，1998b）。亦、大学生181名に対して4～6ヶ月後の再検査相関を求めた結果を表1に示す。各群、各下位領域を通じて、1%水準で有意な相関係数が得られており、概ね満足すべき安定性が示されている（高田他，1996）。

表1 青年・成人用尺度の信頼性指標

	高校生	成人	大学生	下位領域間相関			
	α 係数	α 係数	α 係数	再検査相関	個の認識・主張	評価懸念	他者への親和・順応
相互独立性	.79	.82	.81	.69***			
独 断 性	.73	.73	.75	.67***	.49***	-.28***	-.27***
個の認識・主張	.68	.79	.74	.66***		-.25***	-.19***
相互協調性	.84	.76	.78	.66***			
評 価 懸 念	.79	.75	.77	.66***			.49***
他者への親和・順応	.74	.64	.66	.55***			

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

短縮版尺度：一般成人3,454名に実施した結果に基づく、各下位領域毎のCronbachの α 係数は表2に示す如くである。「独断性」と「他者への親和・順応」の α 係数が稍低い、概ね青年・成人用尺度と同等の数値が得られている。再検査相関についても同様である。従って、短縮版尺度の内的一貫性と安定性はほぼ確保されていると言える。

表2 短縮版尺度の信頼性指標

	α 係数	再検査相関	下位領域間相関		
			個の認識・主張	評価懸念	他者への親和・順応
相互独立性	.70	.60***			
独 断 性	.68	.53***	.40***	-.25***	-.29***
個の認識・主張	.81	.60***		-.21***	-.29***
相互協調性	.70	.56***			
評 価 懸 念	.90	.62***			.49***
他者への親和・順応	.68	.52***			

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

児童・生徒用尺度：小学生（5年生以上）800名、中学生1,020名に実施した結果に基づく、各下位領域毎の α 係数を表3に示す。「他者への親和・順応」の下位領域に稍問題があるが、各領域の内的整合性は概ね認められる（高田，1999a）。亦、小学校6年生73名と中学校2年生56名に対し、2ヶ月後に再検査を実施し再検査相関を求めた結果は表3の如くである。「独断性」のみは相関が稍低い、それも含め各領域で1%水準の有意な相関があり、概ね満足すべき安定性が示されている（高田，1999a）。

表3 児童・生徒用尺度の信頼性指標

小学生	下位領域間相関				
	α係数	再検査相関	個の認識・主張	評価懸念	他者への親和・順応
相互独立性	.77	.65***			
独断性	.71	.37**	.25*	.09	-.24*
個の認識・主張	.71	.81***		-.12	-.24*
相互協調性	.76	.75***			
評価懸念	.73	.64***			.41***
他者への親和・順応	.62	.75***			
中学生	下位領域間相関				
	α係数	再検査相関	個の認識・主張	評価懸念	他者への親和・順応
相互独立性	.77	.79***			
独断性	.71	.56***	.54***	-.12	-.20
個の認識・主張	.71	.84***		-.03	-.15
相互協調性	.77	.86***			
評価懸念	.78	.83***			.57***
他者への親和・順応	.67	.82***			

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

2. 妥当性とは尺度との関連

青年・成人用尺度：集団主義尺度 (Semin, Goossens & Taris, 1994)、自己意識尺度 (押見, 1992)、日本的自己意識尺度 (高田・松本, 1995)、及び自尊心尺度 (Rosenberg, 1965) と各領域との相関は、表4に示す如くである。

集団主義尺度との間には、相互協調性で有意な正相関、相互独立性の「独断性」で有意な負相関がある。自己意識尺度との関連では、公的自己意識及び社会的不安に就いては、相互協調性との有意な正の相関、相互独立性との有意な負相関が見られる。日本的自己意識尺度は、普遍的因子と日本文化に特殊的な因子から成り、前者に属する「分け隔てのない親和性」「他者評価への懸念」「他者への信頼感」「個人の自立」、及び、後者に属する「身近な他者への配慮」「他者評価への防御姿勢」「排他的な利己主義」、の7因子から構成されるが、総じて普遍的因子との相関は目立つ一方、特殊的因子との相関関係は少ない。このように、集団主義、社会的対象としての自己を意識する傾向である公的自己意識、他者がいる場面で精神的に動揺しやすい性質を示す社会的不安、日本的自己意識の普遍的部分と、概ね相互独立性は負、相互協調性は正の関連が強いことは、本尺度の妥当性を反映すると言える (高田他, 1996)。

亦、英訳版青年・成人用尺度を豪太刺利人学生、加奈陀人学生、亜細亜文化の背景を持つ加奈陀人学生に実施し、日本人学生と比較した結果では、日本人の相互独立性はそれ以外の群より有意に低く、日本人及び亜細亜系加奈陀人の相互協調性は豪太刺利・加奈陀人学生より有意

表4 青年・成人用尺度の妥当性指標

	相互 独立性	独断性	個の認識 ・主張	相互 協調性	評価懸念	他者への 親和・順応
集団主義						
伝統的集団主義	-.06	-.08	.03	.25***	.12	.12
他者依存	-.25***	-.33***	-.12	.31***	.23**	.27***
家族依存	-.06	-.11	-.03	.32***	.12	.24***
全体	-.17	-.23***	-.06	.39***	.21**	.29***
自己意識						
私的自己意識	.19	.14	.21	.08	.28*	-.12
公的自己意識	-.29**	-.32**	-.14	.68***	.63***	.54***
社会的不安	-.31**	-.28*	-.25*	.30	.43***	.11
日本の自己						
分け隔てのない親和性	.40***	-.34***	-.36***	.47***	.40***	.42***
他者評価への懸念	-.42***	-.39***	-.35***	.59***	.63***	.40***
他者への信頼感	.09	.07	.11	.09	.04	.10
個人の自立	.38***	.35***	.32***	.06	.00	-.10
身近な他者への配慮	.12	.07	.15	.11	.04	.14
他者評価への防御姿勢	-.16*	-.13	-.15	.34***	.32***	.27***
排他的な利己主義	-.06	-.00	-.11	.12	.16	.05
自尊心	.47***	.33**	.51***	-.23	-.44***	.11

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

に高い(表11参照)。この結果は北山(1998)の論述に合致し、尺度の概念的妥当性を保証するものである(高田, 1999a)。

他方、自尊心尺度との関連に就いては、主に相互独立性との間で有意な正相関が得られているが、相互独立的自己観に依拠した従来の自尊心測定尺度と文化的自己観との関係に就いて、再検討の必要性が示唆される(高田他, 1996)。

短縮版尺度：上記の各尺度との相関に就いて、短縮版尺度の10項目のみを用いて算出した場合も、概ね青年・成人用尺度と同等の数値が得られており、短縮版尺度は一定の妥当性を持つと考えられる。

児童・生徒用尺度：青年・成人用尺度、教師評価、児童生徒用自己意識尺度(桜井, 1992)、自尊心尺度(Rosenberg, 1965)、児童用(Kosawa, Shand & Fujisaki, 1992)及び思春期用(Harter, 1988)コンピテンス測定尺度中の「一般的自己価値」と各領域との相関は表5に示すとおりである。青年・成人用尺度との間には、何方の領域に於いても有意な正相関がある。教師評価の間では、一部の領域を除き有意な正相関が示されている。自己意識尺度との関連に就いては、公的自己意識に関し小中学生とも相互協調性とその下位領域と有意な正相関がある。亦、中学生のみ相互独立性との有意な負相関が見られる。このように児童・生徒用尺度は青年・成人用尺度と教師評定に対応しているとともに、青年・成人用尺度とほぼ同

様の妥当性を有する(高田, 1999a)。他方、コンピテンス尺度と自尊心尺度との関連に就いては、大学生資料と同様に概ね相互独立性との正相関が認められるが、小学校では総じてその程度は弱い(高田, 1998b)。

表5 児童・生徒用尺度の妥当性指標

小学生	相互 独立性	独断性	個の認識 ・主張	相互 協調性	評価懸念	他者への 親和・順応
教師評価	.36*	.32	.46*	.49**	.33	.60***
自己意識						
私的自己意識	.42***	.22**	.44***	.06	.18	-.02
公的自己意識	-.09	-.05	-.10	.59***	.71***	.38***
一般的自己価値	.05	.09	-.02	-.14	-.13	-.12
中学生	相互 独立性	独断性	個の認識 ・主張	相互 協調性	評価懸念	他者への 親和・順応
青年・成人用尺度	.67***	.62***	.72***	.56***	.61***	.31**
自己意識						
私的自己意識	.39***	.28***	.42***	.07	.20**	-.03
公的自己意識	-.23***	-.19*	-.21***	.71***	.79***	.49***
一般的自己価値	.29***	.23***	.28***	-.13*	-.11*	-.11
自尊心	.47***	.36***	.46***	-.20***	-.09	-.22***

*** p .001 ** p .01 * p .05

IV. 尺度得点

既に述べた如く、本尺度は大量の対象者に実施されたが、相互独立性-相互協調性、或いは各下位領域の尺度得点に対して、明瞭な差異を齎していることが現在までに判明している要因、及びそれに関連する要因に関し、以下にその概要を述べる。尚、以下の各資料は、1996年1月～1999年8月にかけて行なわれた調査に基づくものである。

発達段階による差異：小学校5年生から老人に至る以下の7群に対して、相互独立的-相互協調的自己観尺度を実施して得られた、各群の男女別平均尺度得点、標準偏差、信頼区間(95%)は表6～表8の如くである³⁾。即ち、(1)小学5・6年生2,259名(男子1,194名、女子1,065名；平均年齢11.4歳)、(2)中学1～3年生1,197名(男子506名、女子691名；平均年齢13.8歳)、(3)高校1～3年生3,108名(男子1,765名、女子1,343名；平均年齢16.6歳)、(4)大学1・2年生2,671名(男子1,635名、女子1,036名；平均年齢19.1歳)、(5)若年成人1,559名(20～30歳代の男子611名、女子948名；平均年齢33.2歳)、(6)中年成人1,790名(40～50歳代の男子1,118名、女子672名；平均年齢47.2歳)、(7)老人391名(60歳以上の男子206名、女子185名；平均年齢70.7歳)を対象とし、(1)(2)群には児童・生徒用尺度、(4)～(7)群には青年・成人用尺度を実施した結果である。

表6 相互独立性と相互協調性の年齢段階による差異

	相互独立性				相互協調性			
	平均	信頼区間	平均	信頼区間	平均	信頼区間	平均	信頼区間
小学生	4.70 (0.82)	4.66-4.73	男子	4.78 4.73-4.83 (0.85)	5.02 (0.93)	4.98-5.06	男子	4.87 4.82-4.93 (0.95)
			女子	4.60 4.56-4.65 (0.79)			女子	5.19 5.14-5.24 (0.89)
中学生	4.31 (0.94)	4.26-4.37	男子	4.38 4.29-4.46 (0.96)	4.61 (1.00)	4.55-4.67	男子	4.50 4.41-4.59 (1.01)
			女子	4.27 4.20-4.33 (0.92)			女子	4.69 4.62-4.77 (1.00)
高校生	4.40 (0.83)	4.37-4.43	男子	4.42 4.38-4.46 (0.83)	4.88 (0.77)	4.85-4.91	男子	4.83 4.79-4.87 (0.80)
			女子	4.38 4.34-4.43 (0.83)			女子	4.95 4.91-4.99 (0.73)
大学生	4.46 (0.87)	4.43-4.49	男子	4.48 4.44-4.53 (0.89)	4.89 (0.80)	4.86-4.92	男子	4.88 4.84-4.92 (0.82)
			女子	4.42 4.36-4.47 (0.84)			女子	4.91 4.86-4.96 (0.77)
若年成人	4.52 (0.80)	4.48-4.56	男子	4.75 4.68-4.81 (0.79)	4.63 (0.71)	4.60-4.67	男子	4.51 4.46-4.57 (0.76)
			女子	4.37 4.32-4.42 (0.77)			女子	4.71 4.67-4.75 (0.66)
中年成人	4.70 (0.76)	4.66-4.73	男子	4.79 4.75-4.83 (0.74)	4.51 (0.68)	4.48-4.55	男子	4.45 4.41-4.49 (0.68)
			女子	4.54 4.48-4.60 (0.76)			女子	4.63 4.56-4.68 (0.67)
老人	5.02 (0.83)	4.93-5.10	男子	4.96 4.84-5.08 (0.82)	4.79 (0.81)	4.71-4.88	男子	4.83 4.71-4.94 (0.83)
			女子	5.07 4.95-5.19 (0.83)			女子	4.76 4.65-4.88 (0.79)

()内は標準偏差。

相互独立性と相互協調性に就いて、この横断資料に基づく日本文化での発達による変動に関しては(表6)、(1)相互独立性は児童期後期から青年前期にかけて低下し、青年中後期には低い水準を維持した後、若年成人期以降は上昇する、(2)相互協調性は児童期後期から青年前期にかけて低下、青年中後期には上昇し、成人期には再び低下した後、老人期で再度上昇する、(3)従って、相互協調性が相互独立性を凌ぐ傾向は、児童期後期から青年期を経て若年成人期に至る期間でのみで見られる、等の傾向が確認されている(高田, 1999a)。

各下位領域の変動に就いては(表7・8)、概ね相互独立性と相互協調性と同様の発達の変

化を示すが、(1)相互独立性に関して、一般に「個の認識・主張」が「独断性」より強い一方、青年期のみが例外的に「個の認識・主張」が「独断性」より弱い、(2)相互協調性に関して、中学生までは「評価懸念」が「他者への親和・順応」より強く、高校生・大学生では両者がほぼ同等で、成人期以降は「他者への親和・順応」が「評価懸念」より強い、等の傾向が確認されている（高田，1999a）。

表7 相互独立性の下位領域の年齢段階による差異

	個の認識・主張				独断性					
	平均	信頼区間	平均	信頼区間	平均	信頼区間	平均	信頼区間		
小学生	4.92 (1.12)	4.88-4.97	男子	5.01 (1.16)	4.95-5.08	4.50 (0.94)	4.46-4.54	男子	4.58 (0.97)	4.53-4.64
			女子	4.82 (1.05)				4.76-4.89	女子	
中学生	4.25 (1.21)	4.18-4.32	男子	4.32 (1.26)	4.21-4.43	4.35 (1.00)	4.29-4.41	男子	4.41 (0.99)	4.32-4.49
			女子	4.20 (1.18)				4.11-4.29	女子	
高校生	4.29 (1.02)	4.25-4.33	男子	4.29 (1.03)	4.24-4.34	4.47 (0.92)	4.44-4.51	男子	4.50 (0.93)	4.46-4.54
			女子	4.29 (1.00)				4.24-4.35	女子	
大学生	4.32 (1.04)	4.28-4.36	男子	4.35 (1.07)	4.29-4.40	4.55 (0.97)	4.51-4.59	男子	4.58 (0.99)	4.53-4.63
			女子	4.28 (0.99)				4.22-4.34	女子	
若年成人	4.67 (0.97)	4.63-4.72	男子	5.01 (0.92)	4.93-5.08	4.41 (0.87)	4.37-4.46	男子	4.57 (0.90)	4.50-4.64
			女子	4.46 (0.93)				4.40-4.52	女子	
中年成人	4.85 (0.91)	4.81-4.89	男子	4.99 (0.88)	4.94-5.05	4.60 (0.84)	4.56-4.64	男子	4.65 (0.83)	4.61-4.70
			女子	4.61 (0.90)				4.54-4.67	女子	
老人	5.14 (0.92)	5.05-5.24	男子	5.14 (0.89)	5.01-5.26	4.93 (0.93)	4.83-5.02	男子	4.85 (0.94)	4.71-4.98
			女子	5.15 (0.95)				5.01-5.29	女子	

()内は標準偏差。

表8 相互協調性の下位領域の年齢段階による差異

	他者への親和・順応				評価懸念					
	平均	信頼区間	性別	平均	信頼区間	平均	信頼区間	性別	平均	信頼区間
小学生	4.94 (0.98)	4.90-4.98	男子	4.85	4.79-4.90	5.23 (1.37)	5.18-5.29	男子	4.94	4.86-5.02
			女子	5.05	4.99-5.10			女子	5.56	5.49-5.64
中学生	4.40 (1.02)	4.35-4.46	男子	4.39	4.30-4.48	5.09 (1.48)	5.01-5.17	男子	4.74	4.61-4.87
			女子	4.41	4.33-4.49			女子	5.35	5.24-5.45
高校生	4.92 (0.77)	4.89-4.94	男子	4.87	4.84-4.91	4.83 (1.11)	4.79-4.87	男子	4.77	4.72-4.83
			女子	4.98	4.94-5.02			女子	4.91	4.85-4.96
大学生	4.88 (0.80)	4.85-4.91	男子	4.85	4.81-4.90	4.91 (1.12)	4.87-4.95	男子	4.92	4.87-4.98
			女子	4.92	4.87-4.96			女子	4.90	4.83-4.96
若年成人	4.80 (0.68)	4.77-4.84	男子	4.70	4.64-4.75	4.37 (1.04)	4.32-4.42	男子	4.23	4.14-4.31
			女子	4.87	4.83-4.92			女子	4.46	4.40-4.53
中年成人	4.74 (0.65)	4.71-4.77	男子	4.67	4.63-4.71	4.17 (1.04)	4.12-4.22	男子	4.11	4.05-4.17
			女子	4.87	4.82-4.91			女子	4.27	4.19-4.35
老人	5.20 (0.77)	5.12-5.28	男子	5.22	5.11-5.33	4.17 (1.25)	4.04-4.30	男子	4.25	4.08-4.42
			女子	5.18	5.07-5.30			女子	4.09	3.91-4.28

()内は標準偏差。

性差：一般に男子は女子よりも相互独立性が高く相互協調性は低い。併し、相互独立性が低く相互協調性が高い水準にある高校生・大学生と、双方とも高い水準にある老人では性差は有意でないことが確認されている（高田，1999a）。この傾向は各下位領域に於いても概ね同様である。

短縮版尺度に於ける差異：日本人成人に対する短縮版尺度の平均値は、相互独立性と相互協調性の双方に於いて青年・成人用尺度より有意に低くなる傾向が見出されている（高田，1998b）。青年・成人用尺度の尺度値と、青年・成人用尺度から短縮版尺度の10項目のみを用

表9 短縮版尺度との比較

	相互独立性		相互協調性	
	20項目	10項目	20項目	10項目
若年成人	4.52 (0.80)	4.29*** (0.96)	4.63 (0.71)	4.45*** (0.76)
中年成人	4.70 (0.76)	4.47*** (0.91)	4.51 (0.68)	4.28*** (0.77)

()内は標準偏差。

***p<.001で有意差があることを示す。

表10 無作為抽出群との比較

	相互独立性		相互協調性	
	任意	無作為	任意	無作為
若年成人	4.29 (0.96)	4.13*** (1.01)	4.45 (0.76)	4.46 (0.99)
中年成人	4.47 (0.91)	4.30*** (1.07)	4.28 (0.77)	4.27 (1.01)

()内は標準偏差。

***p<.001で有意差があることを示す。

値を表10に示す。相互協調性では両者間に有意差はないが、相互独立性に関しては無作為抽出資料の平均尺度値が有意に低いことが確認されている。表6の成人資料は、通信教育受講者や大学生の父母等の、知的関心が比較的高いと思われる層を中心としている為、斯かる層に於いては相互独立性が一般平均よりも高い水準にある可能性が考えられる(高田, 1999a)。

欧米・亜細亜文化間の差異：現在までに青年・成人用尺度による資料が得られているのは、妥当性の項で既述した、豪太刺利人学生、加奈陀人学生、亜細亜文化の背景を持つ加奈陀人学生に就いてである。その結果は表11の如くである。豪太刺利人学生、加奈陀人学生、亜細亜系加奈陀人の相互独立性は日本人学生より高く、日本人学生・亜細亜系加奈陀人の相互協調性は豪太刺利・加奈陀人学生より高い(高田, 1999a)。

亜細亜文化内の差異：中国人・越南人成人資料が短縮版尺度で、同じく中国人・越南人学生資料が青年・成人用尺度で、現在までに得られている。対応する日本人資料とともに、後者の結果を表11に示す。成人資料に関しては、越南人の相互独立性は中国人より、中国人は日本人より、夫々有意に高い。亦、相互協調性に就いては3つの文化間に有意差は認められない(高田, 1998a)。学生資料では、中国人・越南人の相互独立性は日本人より有意に高い一方、相互協調性に関しては3者間に有意な差はない(高田, 1999d)。

いて各領域の尺度値を算出した結果とを、若年成人と中年成人群毎に比較したのが表9である。各年齢段階に於いて両者間に有意な差があり、短縮版の10項目を用いた場合には、原版の20項目を用いた時よりも、平均尺度値は低くなる傾向が明らかである。従って、短縮版尺度の得点を青年・成人用尺度及び児童・生徒用尺度の得点と直接比較することは出来ないが、短縮版尺度に相当する10項目を用いて算出した場合も、上記の年齢段階差と性差の相対的關係は変化しないことが確認されている(高田, 1998b)。

成人間の差異：無作為抽出を用いた短縮版尺度による資料と、表6の若年・中年成人資料(任意抽出)から短縮版尺度に相当する10項目を用いて算出した尺度

表11 文化間の差異

		豪太刺利	加 奈 陀	巫 細 亞 系	中 国	越 南	日 本	
相 互 独 立 性	男子	5.00 (0.75) n=195	5.04 (0.60) n=59	4.93 (0.87) n=52	4.95 (0.82) n=180	4.88 (0.68) n=184	4.47 (0.86) n=279	
	女子	5.08 (0.75) n=115	4.93 (0.78) n=102	4.88 (0.79) n=130	4.78 (0.82) n=120	4.76 (0.73) n=116	4.34 (0.87) n=318	
	全体	5.03 (0.75)	4.97 (0.72)	4.89 (0.81)	4.88 (0.82)	4.83 (0.70)	4.40 (0.87)	
	相 互 協 調 性	男子	4.71 (0.79)	4.50 (0.65)	4.85 (0.89)	4.66 (0.72)	4.82 (0.60)	4.86 (0.87)
		女子	4.72 (0.79)	4.59 (0.79)	5.02 (0.81)	4.66 (0.63)	4.84 (0.61)	4.94 (0.77)
		全体	4.71 (0.79)	4.56 (0.74)	4.97 (0.84)	4.66 (0.68)	4.83 (0.60)	4.90 (0.81)

()内は標準偏差。

V. 尺度値に関連する知見

本尺度により測定された相互独立性一相互協調性は、様々な心理過程や行動に関連していることを示唆する知見が、これまでに幾つか報告されている。ここでは、それら諸知見を、便宜上「自己」に関連するものと社会的態度・行動に関連するものとに分けて、その概要を述べる。

自己に関する知見：自己概念が形成される際の手掛かりに就いて、Suls (1986) の手法を用いて検討した結果、相互協調性が高く相互独立性の低い者は、同年齢の他者との比較を通じて自己評価する傾向が強い (高田, 1993) ⁴⁾。併し、手掛かりを社会的比較に限らない Schoeneman (1981) の手法を用いた場合には、相互独立性一相互協調性と自己認識手段との明瞭な関係は認められない (高田, 1998b)。

自己を明確に知りたいという自己認識欲求 (上瀬, 1992) に関しては、相互協調性が高く相互独立性の低い者は、自己概念の不安定さを媒介とした自己認識欲求が強いことが報告されている (上瀬・堀野, 1995)。一方、自己の能力が正確に判断される情報への選好性を現す自己査定行動 (Trope, 1983) に於いて、この傾向は日本人被験者にも普遍的に観察されるにも拘わらず、相互協調性が高く相互独立性の低い者は、他者意識が高まった状況で自己査定行動を抑制し、自己批判的乃至人並み志向的行動を示すことが実験を通じて示唆されている (清家・高田, 1997)。

亦、日本文化に於いては自己高揚的傾向が乏しく自己批判的傾向が優勢である可能性に就いては屢々指摘されるとともに議論を呼んでいる。他者に比べて自己劣位を示す情報は速やかに受け入れられる一方、自己優位の情報は受け入れられ難いことを示した高田 (1987) の知見を

追認するとともに、加奈陀人の自己高揚の傾向を同一実験により確認した研究 (Heine, Takata, & Lehmen, 1999) に於いて、自己高揚—自己批判的傾向と相互独立性—相互協調性は並行していることが示されている。更に、日本人被験者の中でも相互協調性の強い者に自己批判的傾向は強いが、加奈陀人に就いては斯かる関連は認められない (高田, 1999c)。

他方、相互独立性の高い者は低い者に比して自尊感情が高いことは既に述べたが、相互協調性が高く相互独立性の低い者は、相互協調性が低く相互独立性の高い者よりも、自己を否定的に認識する傾向が強い (高田, 1998b)。相互協調性が高い者の自尊感情に関しては、更に、対人関係或いは外見に関わる現実と理想の自己評価の差が、自尊感情に及ぼす影響が大きいことが見出されている (高田, 1992)。

社会的態度・行動に関する知見：社会的態度や価値に関して、中国 (高田, 1996; 1997) 及び越南 (高田, 1998b; 1998c) に於ける以下の知見が報告されている。即ち、相互独立性の高い者は低い者に比して、現在進行中の社会・経済改革に就いての政策 (中国：改革開放政策、越南：ドイモイ政策) を支持し、党や政府の公式見解に賛同する傾向が強い。一方、相互協調性の高い者は低い者よりも、現状維持的態度 (中国) 或いは退嬰的姿勢 (越南) が顕著である。亦、中国と越南の双方とも、共産党員の相互独立性は非党員に比べて有意に高い。

関連して、与謝野 (1997) は中国人及び日本人で権威主義的傾向の強い者の中には、相互独立性との結びつきが強い者があることを示している。亦、日本人老人で相互独立性の尺度値が高い者は、権威主義傾向が強いと同時に社会的規範を遵守する傾向が強いのに対して、例外的に相互独立性の高い日本人大学生は、権威主義的傾向と規範遵守傾向が弱いことも見出されている (高田, 1998d)。

他方、日常行動との関連を示唆する知見として以下がある。相互協調性が高い者或いは相互独立性の低い者は然らざる者に比して、自他を比較する社会的比較行動が多いこと、就中、外的・他者志向的比較 (自己の具体的・外面的側面を、自己への不安を基盤に、自分と類似した他者を強く意識しつつ為す比較) 行動の頻度が高いことが、高校生・大学生・中年成人に関して認められる (高田, 1999b)。

マナーの悪い高校生の乗車行動は、集団基盤の行動 (友人同士で必要以上の座席を占拠する等) と単独基盤の行動 (混み合っても座席を詰めない等) の2種に分類されるが、前者は「個の認識・主張」の弱い者、或いは「独断性」の強い者、「評価懸念」の強い者が行う傾向がある。他方、後者は「個の認識・主張」の弱い者、或いは「他者への親和・欲求」が弱い者が行う傾向がある。即ち、総じて相互独立性の弱い者の乗車マナーが悪いことが示唆される (高田・矢守, 1998)。

更に、中学生・高校生・大学生の交友関係を上野・上瀬・松井・福富 (1993) による類型から見ると、相互協調性の高い者には密着的交友 (友人との心理的距離が小さく、同調的な型) と表面的交友 (心理的距離が大きいが、行動的には同調的な型) が顕著で、逆に相互独立性の高い者は独立的交友 (心理的距離は小さいが同調性が低い型) と個別的交友 (心理的距離が大きく同調性も低い型) が多いことが示されている (後藤, 1998)。

以上概観してきた如く、相互独立的—相互協調的自己観尺度は一定程度の信頼性と妥当性を有するとともに、尺度を用いた知見がこれまでに或る程度集積されている。それらの知見は北山（1998）の論放に合致するものも多い。一方、中国人・越南人を初めとして中高年の日本人の相互独立性の尺度値は相互協調性のそれより高いことや、亜細亜人の相互独立性と権威主義との関連等、文化的自己観に関する従来の論議に矛盾する知見も得られている。従って、相互独立的—相互協調的自己観尺度を通じたこれらの諸知見を統合して理解すべく、社会的表象たる文化的自己観が個人の認知表象に反映される過程、文化内分散と文化間分散との関連、個人内に於ける相互独立性と相互協調性の関係、等に就いての検討が今後更に必要であろう。他方、尺度を用いた研究では、測定尺度の意味の共通性への疑問という比較文化的方法に通有の限界を超えることが困難なことを忘れてはならぬ。実証的知見の集積と並行した方法的・理論的検討が必要とされる所以である。

引用文献

- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 遠藤由美 1992 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, 63, 214-217.
- 後藤幾子 1998 文化的自己観からみる集団内の交友関係と適応 —大学生の特異性— 奈良大学大学院社会学研究科修士論文（未公刊）
- 浜口恵俊 1977 「日本らしさ」の再発見 日本経済新聞社
- Harter, S. 1988 *Manual for the Self-perception Profile for Adolescents*. University of Denver.
- Heine, S. J., Takata, T. & Lehman, D.R. 1999 Beyond self-presentation: Cultural differences in self-enhancement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, in press.
- 上瀬由美子 1992 自己認識欲求の構造と機能に関する研究 —女子青年を対象として— 心理学研究, 63, 30-37.
- 上瀬由美子・堀野緑 1995 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景 —青年期を対象として— 教育心理学研究, 43, 23-31.
- 木内亜紀 1995 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 66, 100-106.
- 北山 忍 1998 自己と感情 文化心理学による問いかけ 共立出版
- Kosawa, Y., Shand, N., & Fujisaki, M. 1992 The self-perception of competence by school-aged children in U.S.A. and Japan. 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 41, 283-297.
- 黒川正流 1994 相互依存性の性質と自己解釈図式が対人影響行動に及ぼす効果の検討 平成4・5年度科学研究費補助金研究成果報告書
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 押見輝男 1992 自分を見つめる自分 サイエンス社
- Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent self image*. Princeton: Princeton University Press.
- 桜井茂男 1992 小学校高学年における自己意識の検討 実験社会心理学研究, 32, 85-94.
- Schoeneman, T. 1981 Reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality*, 49, 284-294.
- 清家美紀・高田利武 1997 文化的自己観と自己査定行動 —日本文化における検討— 社会心理学研究, 13, 23-32.
- Semin, G.R., Goossens, A., & Taris, T. 1995 *An index for measuring individualism versus collectivism*. Vrije Universiteit, Kurt Lewin Institute.

- Singelis, T.M. 1994 The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 580-591.
- Suls, J. 1986 Comparison processes in relative deprivation: A life-span analysis. In M. Olson, C.P. Herman, & M.P. Zanna (Eds.) *Relative Deprivation and Social Comparison*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum. Pp.95-116.
- 高田利武 1987 社会的比較による自己評価における自己卑下的傾向 実験社会心理学研究, 27, 27-36.
- 高田利武 1992 独立的・相互依存的自己と自尊感情および社会的比較 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 109-110.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較 -日本人大学生にみられる特徴- 教育心理学研究, 41, 339-348.
- 高田利武 1994 独立的・相互依存的自己理解の発達の变化と環境要因 日本グループ・ダイナミックス学会第42回大会発表論文集, 142-143.
- 高田利武 1996 中国における文化的自己観と企業改革・従業員意識 比較社会変動研究会(編) 社会主義市場経済の深化と社会意識の変貌 -中国「企業改革」下の従業員- 1995年度奈良大学社会学部プロジェクト研究報告書 Pp.73-83.
- 高田利武 1997 中国における文化的自己観 -日中の比較- 奈良大学総合研究所所報, 5, 3-13.
- 高田利武 1998a アジアにおける文化的自己観 -日本、中国、ベトナムの比較- 奈良大学総合研究所所報, 6, 15-27.
- 高田利武 1998b 文化的自己観の形成における社会的比較の役割 -児童期から青年期にかけての横断資料による検討- 平成8・9年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 高田利武 1998c 文化的自己観と企業改革・従業員意識 -ベトナムの場合- 松戸武彦・高田利武(編) アジアの社会変動と従業員意識の展開 -ベトナム・中国・日本の比較研究- 1996年度 奈良大学特別研究費I合同研究報告書 Pp.33-42.
- 高田利武 1998d アジア文化における相互独立性 日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集, 282-283.
- 高田利武 1999a 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 -比較文化的・横断的資料による実証的検討- 教育心理学研究, 47, 480-489.
- 高田利武 1999b 日常事象における社会的比較と文化的自己観 -横断資料による発達の検討- 実験社会心理学研究, 39, 1-15.
- 高田利武 1999c 社会的比較に於ける自己卑下傾向と相互独立性-相互協調性との関連 -文化間変動と文化内変動は並行するか?- 日本グループ・ダイナミックス学会第47回大会発表論文集, 48-49.
- 高田利武 1999d アジア文化における相互独立性 -青年期資料の分析- 未発表資料.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀 1996 相互独立的-相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.
- 高田利武・松本芳之 1995 日本の自己の構造 -下位様態と世代差- 心理学研究, 66, 173-178.
- 高田利武・矢守克也 1998 高校生の乗車行動と文化的自己観 青年心理学研究, 10, 19-34.
- Trope, Y. 1983 Self-assessment in achievement behavior. In J. Suls & A.G. Greenwald (Eds.) *Psychological Perspective on the Self*. Hillsdale; Lawrence Erlbaum. Pp.93-121.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1993 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 与謝野有紀 1997 中国および日本の権威主義的パーソナリティ構造の分化 第70回日本社会学会大会報告要旨 107-108.

注

- 1) 本研究の実施にあたっては、平成10年度奈良大学研究助成金及び平成8・9年度科学研究費の交付を受けた。資料収集に際しお世話になった方々は茲に芳名を列記すべく余りに多いが、深甚の謝意を表する次第である。
- 2) 文化間の相違に就いての概念である相互独立的-相互協調的自己観と区分する為、尺度により測定された個人差に関しては相互独立性-相互協調性の用語を用いる。
- 3) 高田(1999a)より回答者数が増大しているのは、追加実施した資料を含む為である。
- 4) 高田(1993)で用いられているのは40項目の元尺度であるが、改訂版尺度の20項目を抜粋して分析した場合も、高田(1993)の結果は変化しないことが確認されている。これは後述する高田(1992)の知見に関しても同様である。

付録1 青年・成人用尺度

つぎの1～20について、あなた自身にどの程度あてはまるかをお答えください。例えば、「いつも相手の立場に立って物事を考える。」に「ややあてはまる」のであれば、例のように7つの選択肢のうち該当するところに○印をつけてください。

(例) いつも相手の立場に立って物事を考える。

			○			
び	あ	や	ど	あ	あ	全
つ	て	や	ち	ま	て	く
た	は	あ	ら	り	は	あ
り	ま	て	と	あ	ま	て
あ	ま	は	も	て	ら	は
て	る	ま	い	は	ま	ま
は		る	え	ま	ら	ら
ま			ない	ら	ない	ない
る				ない		

1. 常に自分自身の意見を持つようにしている。 |_|_|_|_|_|_|_|
2. 人が自分をどう思っているかを気にする。* |_|_|_|_|_|_|_|
3. 一番最良の決断は、自分自身で考えたものであると思う。 |_|_|_|_|_|_|_|
4. 何か行動をするとき、結果を予測して不安になり、なかなか実行に移せないことがある。 |_|_|_|_|_|_|_|
5. 自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何と思おうと気にしない。* |_|_|_|_|_|_|_|
6. 相手は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる。* |_|_|_|_|_|_|_|
7. 自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じる場所を守り通す。* |_|_|_|_|_|_|_|
8. 他人と接するとき、自分と相手との間の関係や地位が気になる。 |_|_|_|_|_|_|_|
9. たいていは自分一人で物事の決断をする。 |_|_|_|_|_|_|_|
10. 仲間の中での和を維持することは大切だと思う。 |_|_|_|_|_|_|_|
11. 良いか悪いかは、自分自身がそれをどう考えるかで決まると思う。 |_|_|_|_|_|_|_|
12. 人から好かれることは自分にとって大切である。 |_|_|_|_|_|_|_|
13. 自分が何をしたいのか常に分かっている。 |_|_|_|_|_|_|_|
14. 自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる人や、自分のいる状況によって決まる。* |_|_|_|_|_|_|_|
15. 自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない。 |_|_|_|_|_|_|_|
16. 自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける。* |_|_|_|_|_|_|_|
17. 自分の意見をいつもはっきり言う。* |_|_|_|_|_|_|_|
18. 人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い。* |_|_|_|_|_|_|_|
19. いつも自信をもって発言し、行動している。* |_|_|_|_|_|_|_|
20. 相手やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある。* |_|_|_|_|_|_|_|

付録2 児童・生徒用尺度

つぎの1～20の質問について、あなた自身にどれくらいあてはまるかを答えてください。例えば、「いつも自分のペースを守っている」という質問に、あなたが「すこしあてはまる」と思うのならば、(例)のように「すこしあてはまる」のところに○印をつけてください。正しい回答やまちがった回答はありませんから、あなたの思ったままを答えてください。

(例) いつも自分のペースを守っている。

	⊕			
あ	す	ど	あ	あ
て	こ	ち	ま	て
は	し	ら	り	は
ま	あ	と	あ	ま
る	て	も	て	ら
	は	い	は	な
	ま	え	ま	い
	る	な	ら	
		い	な	
			い	

1. いつも自分の意見をもつようにしている。
2. クラスのみんなが自分のことをどう思っているか気になる。
3. 何かを決めるとき、一番いいのは自分自身で決めることだと思う。
4. 何かをしようとするとき、失敗がこわくてまよってしまう。
5. 自分でいいと思ったら、友だちが何とも思っても気にしない。
6. 友だちは自分のことをどう思っているかを考えて、みんなの目が気になる。
7. みんなとはちがう考えをもっているけど、自分が考えたとおりにやる。
8. 友だちと遊ぶとき、友だちと自分のどちらがリーダーかが気になる。
9. たいていは何をするかを自分ひとりでできる。
10. クラスのみんなと仲よくすることは大切だと思う。
11. 良いか悪いかは、自分自身がそれをどう考えるかで決まると思う。
12. クラスのみんなから好かれたと思う。
13. いつも自分のしたいことがわかっている。
14. 先生や友だちがまわりにいるか、いないかで、自分の気持ちは変わる。
15. 自分の考えややり方が友だちとちがっていても気にならない。
16. クラスのみんなと意見が分かれることはいやだと思う。
17. 自分の意見はいつもはっきり言う。
18. 友だちと意見が分かれたとき、友だちにあわせることが多い。
19. 授業などで、いつも自信をもって発表している。
20. だれと一緒にいるかで、自分の考えややり方は変わる。